

【論文】松本亀次郎編纂の日本語教科書に関する一考察

— 日中言語対照研究の視点から —

岩澤 平

日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

A Study on the Japanese Learning Textbooks Compiled

by Kamejiro Matsumoto

— From the Viewpoint of Contrastive Studies of Japanese and Chinese —

IWASAWA Yasushi

Former graduate student of Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

The purpose of this study is to examine, from the viewpoint of contrastive studies of Japanese and Chinese, the Japanese learning textbooks compiled by Kamejiro Matsumoto (1866–1945). A Japanese language teacher, Kamejiro is regarded as a key figure in the prewar Japanese language education of Chinese students studying in Japan. This study clarifies that his Japanese learning textbooks have universal value retaining relevance for Japanese language education today.

1.はじめに

戦前50年間（1866 - 1945）に来日した中国人留学生数は延べ6 - 8万人に達し、「世界中に類のない盛況であった」と言われる¹。松本亀次郎（1866-1945）は、79年の生涯のうち40年余りを中国人留学生教育に従事し、彼のもとで学んだ留学生は2万人以上とも言われ、その中には魯迅や周恩来等現代中国に大きな影響を与えた人物もいた。それゆえに松本は、戦前の中国人留学生教育に携わった日本人教師の中心人物であり、また日本語教育の中心人物でもあったと言われる²。松本は、晩年の著作で自身の教歴について次のように回顧している³。

顧ミルニ余ハ中華学生諸子ニ、日本語ヲ教授スルコト、已ニ三十年余リ、親シク教授シ

タ学生ノ数モ、大方幾万ヲ以テ算ヘルデアラウ。其ノ上教科書モ、言文対照漢訳日本文典、漢訳日本口語文法教科書、改訂日本語教科書、漢訳日本語会話教科書、其ノ他数編ヲ著ハシ、之ヲ以テ、終生ノ天職トシ、之ヲ以テ無上ノ至楽トシ、功名栄達ヲ顧ミズ、日夕兀々トシテ、老ノ将ニ至ラントスルヲ忘レ、今日ニ及ンダ

松本は、1903年に宏文学院⁴で初めて日本語教師として教壇に立ち、早くも翌年には初の日本語教科書『言文対照漢訳日本文典』を編纂出版した。また松本は、晩年まで教壇に立ち続けながら多くの日本語教科書を編纂し、時代や言語の変化に応じてそれらを改訂・再版し続けた。

¹ 張（1993：208）

² さねとう（1981：340）

³ 松本（1934：3）

⁴ 1902年、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎（1860-1938）が清国留学生のために創立。初めは「弘文学院」と称したが後に「宏文学院」に改称。

松本に関する研究は、これまで日中両国で行われてきた。それらの研究を①中国人留学生教育の教育者としての「教育実践」と②日本語教師としての「日本語教育」の2つに分類すると、①「教育実践」に関する研究が多く、その代表は二見（2016）等である。一方、②「日本語教育」の研究は代表的なものに関（1997）、吉岡（2005）等があるが、①に比べて相対的に少ない。このことについて、松本の復刻版教科書監修者の吉岡（2011）は、解説で「日本語教育上でのかれの功績はまだ十分に明らかにされているとは言えず、今後の研究を期待したい。」と記し、最後に下記の通り指摘している⁵。

松本亀次郎の著作を見て気付く特徴は、「言文対照」とあるように、上記七冊の中で宏文学院のメインテキストである『日本語教科書』三巻以外、すべて中国語訳がついており、漢字にはルビをつける方針をとっている。…これは亀次郎が生涯中国人学習者という特定の母語話者を対象に教育を行い、対照言語の上から学習上の困難点や誤用などが推測でき、その利点を生かした教材開発が学習者に大きな効果があることを理解していたこと、また自学自習ができることが学習者にとって大きなメリットだと考えた結果だと思われる。

筆者は、岩澤（2020）で松本の「日本語教科書」に関して論究したが、「日中言語対照研究」からの視点ではなかった⁶。また管見の限りでは、松本編纂の日本語教科書を「日中言語対照研究」の視点から考察した先行研究は見当たらない。そこで本稿は、主として「日中言語対照研究」の視点から松本編纂の日本語教科書全般について考察する。松本は著作の中で、「日本文と漢文との異同を比較対照して文法的に品詞論からも文章論からも明細に教授せねばならぬ」⁷、「毎語適切ナ漢字ガ填テテアルカ

ラ、日華両語ノ比較研究ヲスルノニモ、大イニ便利」⁸、「本書ノ訳文ハ、読者ノ比較研究ニ便ズル為、務メテ原文ト語々相対スルコトヲ期シタ」⁹と記している通り、中国人が日本語を習得するためには、「日中両語の比較研究」をすることが効果的と考え、自らも中国語を学習し両語の比較研究をしながら教科書編纂に取り組んだ。また松本編纂の日本語教科書には、「言文一致」の流れにより「文語」から「口語」に大きく変化する時代であったことや戦争等による影響もあると考えられるので、本稿ではそうした時代背景との関係も含めて総合的に考察する。

戦前の留学生は、中国語母語話者が圧倒的に多かったが、現在の留学生の母語は多様化している。しかし、中国語母語話者が圧倒的に多い状況は変わらない¹⁰。その意味で、戦前に松本が編纂した日本語教科書に関して、「日中言語対照研究」の視点から考察することは、現在の日本語教育にとっても、一定の価値を有するものと考えられる。

なお、本稿の引用文献の旧字体や旧仮名遣いは、原則として現代表記の基準にのっとり書き改めた。

2. 言文一致政策と日本語教科書編纂

明治政府は、日本の近代化のために西洋の文化を取り入れる欧化政策を始めた時、西洋諸国の文章には基本的に「文語」と「口語」の隔たりがないことに気がついた。しかし当時の日本には、江戸幕藩体制の支配が長く続いたことにより、移動が不自由であったため各地域の言葉（方言）が発達し、日本語と呼べる統一の言語は存在しなかった。また「文語」と「口語」の間には大きな隔たりがあり、特に公文書の文字表記が漢文主体の文語体表記であったことは、統一国家の形成や国民の育成に大きな支障があると考えられた。そのため明治政府は、必要に迫られて「言文一致政策」のもと近代日本の国家語としての「国語」を作った。従って、「国語」は決して日

⁵ 吉岡（2011：v-xii）

⁶ 岩澤（2020：157-158）

⁷ 松本（1939：54）

⁸ 松本（1927：3）

⁹ 松本（1936：3）

¹⁰ 外国人留学生在籍状況調査（2020年5月1日現在）によると外国人留学生総数は279,597人で中国：121,845人（43.5%）、台湾：7,088（2.5%）で全体の46.1%を占める。出所：文部科学省公式ウェブサイト <https://www.mext.go.jp>（2021年12月10日閲覧）

常のことばではなく、明治のはじめ、西洋の事情などにも学び、熟慮の末作り出された、文化政策上の概念だった¹¹と言われる。また東京語を基準とした「標準語」が作られ、学校教育で「国定読本（尋常小学読本）」等により全国的に普及させた¹²。さらに当時の知識人等による「言文一致小説」（二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉等）も生まれるようになり、新聞の社説も次第に言文一致体で書かれるようになった。

一方、中国（清朝）は日清戦争の敗戦をきっかけに初めて日本語に目を向けるようになった。清朝政府は体制維持のために「変法」（改革）が必要であると考え、いち早く西洋文化を導入してアジアの強国となった日本にそのモデルを求めたのである。しかしその目的は、「日本文化」を学ぶためではなく、日本を通して手っ取り早く「西洋文化」を導入することだった。当時、日本語と中国語は同文（漢字）であるため容易に理解でき、また地理的にも近く同じ儒教文化を基調としている等の理由から、わざわざ西洋諸国から直接学ぶより、すでに多くの西洋文化を同文（漢字）で翻訳している日本から学ぶ方が効率良いと考えられたからである。この時代の代表的な人物の一人が、梁啓超（1873-1929）¹³である。彼は西洋文化を翻訳した日本書から得た新知識をいち早く中国語に翻訳して中国に大きな影響を与えた。特に彼は当時の日本書が殆ど漢文交じりで書いてあることから、「和文漢読法」¹⁴を編み出し同文である日本語は容易く習得できるものとして広めた。彼にとっての日本語は「読む」ことができれば十分だったからである。一方、日本の教育機関で本格的に学ぶために来日した中国人留学生にとっての日本語は、「聞く」「話す」「読む」「書く」4技能全てを習得する必要がある、そのために求められたのは、中国語と日本語の違いを体系的にしかも中国語で分かりやすく解

説する「文法書」であった。ところで明治期の日本文は、「漢文体、和漢混交文、明治普通文、言文一致体」といった様々な文体が並存している状況¹⁵であった。また当時は「文語」と「口語」の隔たりが大きく「口語文法」も確立されていなかった。こうした時期に松本が編纂した『言文対照漢訳日本文典』（1904年）は中国人学習者から大いに歓迎された。なぜなら当時すでに中国人が編纂した漢訳日本語教科書も多数あったが、それらは特に文法上多くの難点があったからである。しかし、本書（文法書）は、のちに「他の教科書と比べると、本文典は清国学生の学習する難点に対して、重点的に説明し、教育方法も後の中国人による編纂される教科書に影響を与えた」¹⁶と評価されている。松本は、本書編纂後、宏文学院の日本語教科書編纂の中心者として『日本語教科書』全3巻を編纂したほか、生涯多数の日本語教科書を編纂出版し、それらを「言文一致」による時代や言語の変化に応じて改訂・再版し続けた。戦前の日本語の文章は、次第に口語が主となっていったが、昭和に入ってもなお文語的な特徴が残っており、学習者は口語と文語の違いを比較対照して学ぶ必要があった。松本は、こうした点も配慮して適宜訂正し続けたので学習者に高く評価され、各教科書は再版を重ねた。

3.松本の日本語教育観と教科書編纂

松本は、中国人留学生への日本語教授法と教科書編纂の考え方について、次のように記している¹⁷。

語学ヲ教授スルノ法、大要二有リ。其ノ一ヲ自然的語学教授法ト為ス。猶嬰兒ノ父母ノ懷里ニ在リ、始メテ近易ノ単語ヲ学ブが如ク、反復練習スルヲ以テ唯一ノ教授方法ト為シ、無意識

¹¹ 田中（1981：115-116）

¹² 1901（明治34）年、「尋常小学国語科実施方法要領」で「国語教授ニ用フル言語ハ主トシテ東京ノ中流以上ニ行ワレ居ル正シキ発言及ビ語法ニ従フモノトス」とし東京語が正式に教科書に採用されることになった。

¹³ 清末民初の啓蒙家、日本に亡命（1898-1911）。

¹⁴ 「和文漢読法」は日本文の7～8割を占める漢字を

中国語の単語そのものとして理解シカタカナを無視して読めば中国人の理解できる漢語になるとの読み方。

¹⁵ 南（2007：49）「明治普通文」は、明治以降に標準的な文語文として社会全般に広く行われた文体で、その骨子は漢文の訓読文。

¹⁶ 陳（2014：147）

¹⁷ 松本（1936：1-2）

ニ記憶セシメント欲スル即是レナリ。其ノニヲ理論的語学教授法ト為ス。教授ノ基礎ヲ文法ニ置キ、組織的ニ言語ノ意義性質効用変化等ヲ解説シ、然ル後反復練習ノ功ヲ積マシメント欲スル者、即是ナリ。予中華民國留学生ニ対シ、此ノ二種ノ教授法ヲ試ムルニ、…十五歳以上既ニ教育ノ素養有ル者ニ対シテハ、男女学生ニ論無く理論的語学教授法ヲ採用スルノ宜シキニ適ヘルヲ悟レリ。然ルニ一部ノ教育者尙未ダ之ヲ察セズ、文字語言ノ全ク相異ナル西洋人ト同文同種ノ中華民國学生トヲ同一視シ、圧迫的ニ自然的語学教授法ニ強行セント欲スル者有リ。恰モ専制政治ノ遺法ヲ語学教授界ニ施行セント欲スルガ如シ。誠ニ被教育者ノ心理作用ヲ、藐視スルノ甚ダシキ者ト謂フ可シ。夫レ中華民國留学生ノ文法ヲ重要視スルヤ、実ニ意表ニ出デ、動詞形容詞助動詞ノ語尾変化及ビ法ノ如キ、助動詞副詞接尾語等ノ複雑ナル意義用法ノ如キ、一々之ヲ記憶シテ誤ラザルヲ期ス。是ヲ以テ其ノ読本或ハ日用会話等ノ専ラ応用ニ属スル科目ヲ授クル場合ト雖、単ニ大意ヲ講説スルノミニテハ、決シテ彼等ノ求学心ヲ満足セシムルコト能ハズ。必ズ文法ノ規則ニ照シ剖析分解シテ、之ヲ教へ、然ル後全体ノ意義ヲ詳説セザル可カラザルナリ。予此ノ経験ニ基キ、曾テ言文対照漢訳日本文典及ビ日本語教科書(語法用例ノ部)日本語会話教科書(此書専主応用)等ヲ編述セシ

以上の要点は、下記の通りである。

- ① 日本語の教授法には「自然的語学教授法」と「理論的語学教授法」があり、中国人留学生には後者が適している。
- ② 同文同種の中国人留学生を文字語言の違う西洋人と同一視し「自然的語学教授法」で強制的に教えるのは学習者心理を無視した教育である。
- ③ 中国人留学生は特に文法を重視しており、各品詞の機能や変化の規則等を明快に教授しなければ彼らの向学心を満足させることはできない。

以上の点から、松本は、中国人学習者に日本語を習得させるためには、学習者のニーズを良く理解し、両語が「同文(漢字)」であることを活かしながら比較対照して、文法的に明確に教える必要があると考えて教科書を編纂したことが分かる。

4. 松本の日本語教科書の概要と特徴等

4.1 松本編纂の各教科書の概要と特徴

松本が生涯に編纂出版した主な日本語教科書は、以下の通りである¹⁸。書名、初版発行年、(重版回数)の順に記す。

- A 『言文対照漢訳日本文典』1904年(40版)
- B 『日本語教科書』1906年(19版)
- C 『漢訳日本語会話教科書』1914年(17版)
- D 『漢訳日本口語文法教科書』1919年(24版)
- E 『訳解日語肯綮大全』1934年(13版)
- F 『華訳日本語会話教典』1940年(2版)

吉岡(2005)は、内容・構成の観点から、A、Dは「文典型教材」、B、Eは「語法型教材」、C、Fは「会話教材」に分類している¹⁹。

A 『言文対照漢訳日本文典』1904年(40版)

本書は、松本が宏文学院で中国人留学生への日本語教育を始めた翌年に出版した初の教科書である。松本はその経緯について、「教授者被教授者双方共彼此の会話に通じないものが文法を教へるのは難儀であったが、短時間に日本語文を最も効果的に教へるにはどうしても文法を教へねばならぬ必要が起つてきた。当時の宏文学院の教務長は三澤力太郎氏で…当時僕に一つ教案を立てて試みに文法を教へて見たらどうだと言はれ、学生の要求と三澤教頭の支援とによって一つの教案をつくり後に一冊の書物として発表した」²⁰と記している。またその当時の授業のエピソードとして、学生の一人の魯迅が教室授業で日本語に漢字を当てた時の鋭い指摘に対して、「僕は漢文字の使用法は本場の支那人と共に研究する必要の有る事をつくづく感じさせられた。」²¹と記していることから、松本は教室現場で中国人学生に日本語を教授するとともに学生と一緒に日中両語

¹⁸ 汪向荣(1991:243)

¹⁹ 吉岡(2005:16-17)

²⁰ 松本(1939:54)

²¹ 松本(1939:53)

を比較対照しながら同書を編纂したことが分かる。また本書の特徴について、次の通り記している²²。

この向きの書物では僕が先鞭を着けたのと、文語と口語を対照して例も規則も並べ挙げ訳文が比較的穏妥…此の文典は言文対照と名づけてをるが文語体が主で口語体が従である。といふのは当時はまだ口語のやつと芽を出した時分で有名な紅葉の「金色夜叉」や蘆花の「不如帰」でも登場人物の対話にこそ口語体だが草紙地は文語体で書いてある。教科書は勿論文語体が多い。随って漢文と相距る甚だ近いのである。…この文典を読めば大概当時の教科書は理解せられ又日本語を漢文に訳出する規準になったので、それが為当時は大いに重宝がられた

以上の要点をまとめると、次の通りである。

- ① 日本語の「文語」と「口語」を並べて比較対照し、文法的規則と例文を付して説明した。
- ② 当時の状況に合わせ「文語」をメインにした。
- ③ 適切な中国語訳を付けたので日本語を中国語に翻訳する基準になった。

当時は「言文一致」の過度期であり、東京語を基準とした標準語も普及し始めたばかりであった。また中国語も「言文一致運動」²³が本格的に始まっていない時期であったため、適切な中国語に翻訳することは容易でなかった。本書は、日本語の文語と口語の比較対照に加えて中国語訳も添えたので、3種類の言語を比較対照して学習することができる教科書だった。また本書は、日本語を中国語に翻訳する時の基準になる点も中国人学習者に評価される理由であった。

本書の構成は、「第1編品詞概説（9品詞及び接頭語接尾語・助動詞・助詞）、第2編文章概説（文章・文章形式・修飾語・主部客部補足部説明部・成分倒置）、第3編品詞詳説」と日本語の文法全体を網羅した内容になっている。一例を挙げれば、以下は、

²² 松本（1939：55）

²³ 小池・鄭（2001：112） 中国語の「言文一致運動」は、1917年に始まった文学革命運動と魯迅の小説創作

「文章ノ主成分及主成分ノ位置」の「日本文ト漢文トノ比較」の一部分である。先ず日本語と中国語の構文における成分の位置・順序の相違を文法的に説明した後、表1の通り、両言語で並記して説明している。原文は縦書きだが、本稿では横書きで記す。

表1『主成分ノ位置・日本文ト漢文トノ比較表』

日 文	漢 文
第四 他動詞ガ説明語ト爲ル者。其ノ一例。主語。客語。説明語。	第四 他動詞爲説明語者。其一例。主語。説明語。客語。

「客語」は「目的語」，「説明語」は「述語」を指す。

表1の説明の後に具体的な例文を幾つか提示している。下記にその一例を示す²⁴。上段に日本語文語例文とその中国語訳，下段には口語例文（中国語訳は無し）を並記して、比較対照できるようにしている。

日本語文語体： $\overset{\text{ドージ}}{\text{童}} \overset{\text{ミチ}}{\text{子}} \overset{\text{シ}}{\text{モ}} \overset{\text{道}}{\text{ヲ}} \overset{\text{知}}{\text{レ}} \overset{\text{リ}}{\text{。}}$
主語 客語 説明語

中国語対訳： 【童子尚知道】

日本語口語体： $\overset{\text{コドモ}}{\text{子}} \overset{\text{ミチ}}{\text{供}} \overset{\text{シ}}{\text{デ}} \overset{\text{道}}{\text{ヲ}} \overset{\text{知}}{\text{ッ}} \overset{\text{テ}}{\text{居}} \overset{\text{ル}}{\text{。}}$

上記の通り、学習者が文法説明や表1では理解が不十分な場合でも、「日本語文語体例文」，「中国語対訳」，「日本語口語体例文」を比較対照することで理解できるようにしている。また本書の表記は全て漢字に総ルビ（片仮名）を付けており、上記例文でも漢字に片仮名で表音的に記している点も注目される。中国人にとっては、同じ漢字でも発音がどのように違うのかを比較対照しながら学ぶことができるからである。以上の様に本書は、自学自習できる点も中国人学習者に歓迎される理由であったと考えられる。なお本書は、松本がその後の言語の変化に応じて訂正し続けたため、昭和10年代まで40版も重版される異例の書となった。

の活動の後のことである。

²⁴ 松本（1904：37）

B『日本語教科書』(全3巻)1906年(19版)

本書は、宏文学院が総力を挙げて編纂した日本語教科書である。「宏文学院編纂」となっているが、「序」に同学院長の嘉納治五郎が「使教授松本氏編纂日本語教科書。諸教授賛助之。」(教授松本亀次郎氏に日本語教科書を編纂させ、諸教授が之を賛助)²⁵と記していることから、松本を中心に同院の日本語教師が協力して編纂したものだが、松本の日本語教育観が反映されている教科書とみなされている²⁶。

本書の特徴は、大要以下の通りである。

- ① 仮名の発音から始めている。
- ② 語法²⁷用例を学ぶことを主目的としている。
- ③ 日本語で最も学習困難な助詞・助動詞の用法や副詞・接頭語・接尾語の用例を示している。
- ④ 平語(平常語)と敬語の用法を比較対照する。
- ⑤ 東京語を標準語として採用している。
- ⑥ 日本語特有の漢字(兎角、丁度、一寸、矢鱈等)も習得する必要があるため使用している。

本書全3巻は、合計187課で構成され、各課の題がそのまま学習項目(文型)を示している。また表記は、片仮名と平仮名が数課ごとに入れ替わり使用され、両方を比較対照して習得できるようにしている。注目する点は、松本が編纂した教科書は、本書以外全て文法説明と対訳(中文)が付いているが、本書だけは付いておらず漢字にもルビが付いていない。これは本書が宏文学院で使用する「教室授業用教材」として、教師と一緒に学習することが前提の教科書であるためと考えられる。なお本書は、発刊後30年以上過ぎた1937年に大幅改訂され、「改訂日本語教科書」²⁸として再版された。緒言には、「語彙ガ豊富デ、有ラユル場合ノ用例ガ網羅シテアリ、且ツ日本語ヲ中国人ニ授ケルニ当ツテ、ドンナ語ガムヅカシイカ、ドンナ風ニ組織立ツタラ好イカ、ソナナ処ニ、人知レズ非常ニ念ヲ入レテアル…此ノ本ハ、原ト口語ノ語法用例ヲ主トシタ者デアアルガ、学生ノ記憶練習ニ便ズル為ニ、多ク問答体ヲ採用シタ

カラ、文法応用ノ会話書トモ、謂フ可キ者デアアル」と記されている。なお吉岡(2005)は、本書の文法学習項目は、現代の初級の基本的文法事項と87%と非常に高い比率で重なりと評価している²⁹。

C『漢訳日本語会話教科書』1914年(17版)

本書は、松本が宏文学院で教鞭をとった後、1908年に清朝政府の招聘により北京の京師法政学堂に赴任し、約4年間教鞭をとり、1912年に帰国してから出版した会話教科書である。本書は、もともと宏文学院時代に嘉納学院長の委嘱を受け同学院の会話教科書として編纂したものであったが、その時は中国語訳が付いていなかった。本書はその会話教科書に中国語訳を付けて編纂出版したものである。会話文なので当然中国語も「口語」でなければならない。緒言には、次のように記されている。「本書ノ漢訳ハ、余嚮ニ北京ニ在リ、支那語ヲ学ブ時、我ガ師宗蔭先生ト共ニ、参酌シテ訳出セル者ナリ…本書ノ漢訳ノ如キ、一助詞一感歎詞ノ微ト雖、細大漏サズ、務メテ原文ノ詞辞ト一致セシメ、以テ日華両国ノ語言ヲ、比較研究スル者ニ便ナラシム。…本書訳文ハ、北京官話ヲ用フト雖、聞北京土語ノ中国各地ニ通ゼザル者有リ。吉澤嘉壽之丞氏及ビ曾横海、李驪捲白鳳飛諸氏ノ閱正ヲ経テ、普通官話ニ改ム。」

松本は、北京赴任前は中国語(口語)ができなかったが、約4年間の北京滞在中に、宗蔭氏のもとで中国語(口語)を学習し、同氏と共に本書を翻訳できるレベルにまで達した。また「北京官話」³⁰を使用した、「北京土語(方言)」は排除したとも記している。本書の会話文は当時の口語であり、100年以上も前の会話文なので現在使われない表現や語彙も多々あるが、全体的に現在でも理解できる中国語(口語)である。特に注目する点は、異文化間コミュニケーションとしての挨拶言葉である。中国語には元々「こんにちは」のような挨拶の「定型表現」

²⁵ 宏文学院編纂(1906:1)日本語訳は筆者によるもの。

²⁶ 吉岡(2005:16)

²⁷ 吉岡(2011:vi)は「語法は文型と解釈してよい」としている。

²⁸ 全3巻を1巻に合本し全体は157課の構成にした。

²⁹ 吉岡(2005:26)

³⁰ 「北京官話」は清時代に成立したといわれる北京音を基準とした中国語で当時最も規範的に使われた。

はなく、近代に入り外国からもたらされたといわれる³¹。そのことは、以下の翻訳からも分かる³²。

第二課 挨拶ノ会話 (應酬的話)

- ① 甲：今日ハ。(白天彼此應酬的話)
- ② 乙：今日ハ。
- ③ 甲：今晚ハ。(晚上應酬的話)
- ④ 乙：今晚ハ。
- ⑤ 甲：御早ウゴザイマス。(您早起來了)
- ⑥ 乙：御早ウゴザイマス。(您也早起來了)

上記①「今日ハ」と③「今晚ハ」の訳は、それぞれ「白天彼此應酬的話」(昼間の双方の挨拶言葉)と「晚上應酬的話」(夜の双方の挨拶言葉)という機能説明となっている。これは、当時の北京に挨拶の定型表現がなかったからであろう。一方、⑤「御早ウゴザイマス」に対しては、「您早起來了」という直訳的な中国語があてられており、松本が創意工夫して翻訳したものと考えられる。

本書の構成は「緒言」「会話」「付録」からなり、「会話」は第1課「教場用語」、第2課「挨拶の会話」、第3課から最後の第49課まで日常生活に必要な場面での会話である。また「付録」に「候」の用語を中心とした手紙文の解説・用例があり、全て中国語訳が付されて比較対照できるようになっている。これは手紙のやり取りをする際に、当時はまだ「候文」を使用していたために、学習する必要があると考へて付け加えたのであろう。全体的に本書は単なる会話教科書というより日本語と中国語の通訳翻訳にも役に立つ「漢訳日中会話教科書」とも言える。

D『漢訳日本口語文法教科書』1919年(24版)

松本は帰国後、中国人留学生のための「日華同人共立・東亜高等予備学校」の創立(1914)に多忙を極めたため、長年必要と感じながら編纂できなかった「口語文法教科書」を出版できた喜びを緒言に記している。本書の特徴は、大要以下の通りである。

- ① 簡明な解説文に全て中国語対訳を付けている。

- ② 動詞・形容詞・助動詞等の語尾変化を文語文と同じ6段に配列し、口語文と文語文の比較対照ができるようにしている。

- ③ フリガナは歴史仮名遣いを用いているが、漢字音には表音的な仮名遣いを用いている。

本書の構成は、「第1篇：音韻及び文字解説」、「第2編：品詞概説」、「第3篇：文章概説」、「第4編：品詞詳説(名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞・副詞・接続詞・感嘆詞・接頭語・接尾語)」、「第5編：文章詳説」、「第6編：解剖(品詞的解剖・文章的解剖)」、「索引(50音別)」、「活用一覽」(計400頁)で口語文法項目をほぼ網羅している。なお本書は、1936年の「改訂普及版(第14版)」で大幅に改訂され、その後24版まで再版を重ねた。特に注目する点は、「改訂普及版」の緒言に当時の著名な日本語教育学者・銭稻孫氏による漢訳の訂正を受け、「由来本書ノ訳文ハ、読者ノ比較研究ニ便ズル為、務メテ原文ト語々相對スルコトヲ期シタノデ、往々措辞ノ妥當ヲ欠ク者ノ有ルヲ免レナカッタガ、今幸ニシテ、先生ノ親切丁寧ナ削正ヲ経タノデ、完全ニ此ノ欠点ヲ除去シ」と記していることである。対訳により両語を正確に比較対照できることを、松本が極めて重視していたことが分かる。

E『訳解日語肯綮大全』1934年(13版)

松本は、1930年4月中国教育事情の視察旅行を行い、翌年7月にその報告を兼ね『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』を著し各界要人に贈った。同書は、日本の中国侵略に断固反対する意見書ともいふべき内容であったことから、その反響は大きく松本は東亜高等予備学校の教頭を辞して名誉教頭になった。しかし彼は、教壇には立ち続け、日本語の授業を担当しながら教科書編纂に全力を注いだ。その結果完成したのが本書であり、松本の集大成の日本語教科書ともいふべきものである。緒言には、30年余の教歴を回顧し、「日語教授ノ真諦ト、学生ノ日語ヲ学ブニ何ガ進歩ヲ妨ゲル覆害ト成ツテ居ルカト云フコトハ、詳悉シテ遺サヌ積リデアル。其処デ老後ノ思出ニ、此ノ書ヲ著シテ敢

³¹ 西(2015:84)

³² 松本(1919:12) 中文の日本語訳は筆者による。

テ世ニ問フコトニシタ…日本語ノ肯綮³³ニ中ル者全部ヲ網羅シ、其ノ上、仮名漢訳ヲ附シテ、学習ニ便シ、語法ニハ詳細ニ説明ヲ加ヘ」と記している。

本書の構成は、「第1篇・仮名ト音韻」(13課)、「第2編・語法応用会話」(全144課)、「第3編・日本口語文法大綱」(品詞概説・文章概説)、「第4編・文語用例一斑」(法律文・普通文・漢文直訳文・中古文・書簡文・証書・届出書等124章)、「第5章・外来語ノ新語ト地時事文」(全42章)、付函(口語活用言及ビ助詞全函・文語活用言及ビ全函)となっており、上段は日本語、下段は中国語対訳である。またフリガナは歴史的仮名遣いを用い、漢字音には表音的な仮名遣いを用いている。以上の点から本書は、「総合的日本語教科書」ともいうべき内容で、学習者が日中両語を比較対照しながら自学自習できることに配慮している。

各編の内容と特徴は、大要以下の通りである。
 第1篇・仮名ト音韻：音韻は言語の根源で仮名はその音韻を写す道具であるとし、正確な発音ができるように必要な反復練習問題が多数提示されている。
 第2編・語法応用会話：語法(文型)を日常会話の例文の中に入れて、理論と応用が同時に学習できるように工夫されている。日常使う語彙も網羅して例文に入れてあり、様々な場面での会話が学べる。
 第3編・日本口語文法大綱：初学者のために口語文法の大綱を示し、問答式で語法用例(文型・例文)を示すことで理解し易いようにしてある。
 第4編・文語用例一斑：当時の新聞や教科書は口語が主となっているが、実際には純粋に口語だけのものではなく文語と口語の混交文なので、口語と文語の差異の出る助動詞に重点を置いて例示している。
 第5章・外来語ノ新語ト地時事文：社会的に重要な新聞には外来語の新語が多いので、外交・経済・思想等の事例80語を選抜し例文付きで提示している。

なお吉岡(2005)は、本書の文法学習項目は、現代の初級の基本的文法事項と82%と非常に高い比率で重なりと評価している³⁴。

F『華訳日本語会話教典』1940年(2版)

本書は、日本の中国への侵略戦争(日中戦争)の最中に著されたものである。本来は、Eが松本の最後の集大成の教科書になるはずだったが、時局が松本に本書を著させたと考えられる。なぜなら当時、「満州国」³⁵をはじめ中国の日本占領地等において日本語教育は、「日本精神」扶植のための実質的な侵略戦争の手段となっていた³⁶。また同時に中国人留学生教育に対しては、「排日」との疑念がかけられていた。松本は冒頭緒言で、嘉納治五郎等をはじめとする中国人留学生教育に従事した先人の功労を紹介し讃えた上で、「留日生教育ト言ヘバ、直チニ排日ト結ビツケテ、兎角皮相的ナ見解ヲ下ス者ガ少ナクナイガ…隣邦人ノ教育問題就中留日学生問題ハ、最も重要ナ者ト考エル。今ニシテ適応ノ対策ヲ講ジナケレバ、臆テ一陽来復世界平和ノ再現ヲ見ル日…」と記し、中国人留学生教育の重要性を強く訴えている。これは、当時の政策批判ともとられかねない主張だったはずだが、松本は本書の出版を通して自らの信念を訴えたかったのではないだろうか。但し、当然その為だけではなく、Cの日本語会話教科書を出版(1914年)してからすでに30年近く経過し、特に「会話文」は「言文一致」の進展に伴って大きく変化していたことや、戦時下における日本語学習者の増加という状況に対して、改めて発音・文法・文型等を含めた総合的「漢訳日本語会話教科書」を出版する必要性を感じていたことも本書編纂の動機にあつたと考えられる。そのことは、以下に記す本書の構成と特徴から分かる。

第1篇・仮名発音(全11課)：中国語話者が間違い易い発音を示し、発音練習用の反復練習問題がある。

³³ 「肯綮」とは「急所」の意。

³⁴ 吉岡(2005:26)

³⁵ 「満州国」は日本による傀儡国家なので「満州国」と表記した。中国では「偽満州国」と呼ばれる。

³⁶ 関(1997:33)「日語教師ハ日本語教授ニ際シ単ニ語学トシテ之ヲ扱フコトナク日本語ヲ通テ日本精神、風俗習慣ヲ体得セシメ以テ日満一体ノ真義ヲ発揚スルコトニ努ルコト」が日本語教師に求められた。

第2編・基礎会話（全29課）：基本的な文法・文型と語彙を対話形式で学習できるようにしている。

第3編・日用会話（全41課）：日常生活や旅行に必要な場面でのトピックが対話形式で提示されている。翻訳は当時の北京語（口語）である。なおC編纂時は北京語に挨拶の定型言葉は無かったと前述したが本書では、以下の通り、現在も使われている言葉で翻訳されている。

第五十三課 朝

オ早ウゴザイマス。 您早啊（吃飯嘛）。

オ早ウゴザイマス。 早啊您哪（吃了）。

第4編・日本見学（全120頁）：（後述）

第5編・年表ト地図：歴史年表と訪問地の地図。

第6編・挿絵ト説明：日本中国各地の写真と地図。

本書の上段は日本語、下段は中国語対訳であり、振り仮名は歴史的仮名遣いを用いているが、漢字音には表音的な仮名遣いを用いている。こうした点からも、本書が自学自習のできる総合的「日本語会話教科書」を意図して編纂していることが分かる。

特に「第4編・日本見学本編」について松本は、「中国人留学生には、せつかく日本語を学ぶのならばぜひ日本の歴史や日中間の友好交流の歴史と『日本精神』の基調を為す日本の歴史も一緒に研究して欲しい」（大意）と記している。本編が全体の6割以上を占めることから、特に力を入れていることが分かる。「満州国」や占領地で普及している日本語教科書には、「日本精神」とは特別なもので日本人と日本文化の優秀さをことさら強調する傾向があるが³⁷、松本が本書で記す「日本精神」は、長い日中間の友好的文化交流の歴史と密接不可分な関係にあることを強調している点が注目される。

4.2 現在の日中言語対照研究と松本編纂の教科書

近年日中両語の対照研究が盛んになり、多くの研究成果が生まれている。中でも、「中国語話者のための日本語研究会」は、「習得研究の流れに身を置

きながらも、常に現場の声に耳を傾け、日中対照研究の成果を生かして学習者の母語によるプラスの転移とマイナスの転移を体系的にとらえ、中国語話者に対する理想的な日本語教育について考える」³⁸をスローガンに掲げている。これはまさに松本が中国語話者への日本語教育で実践したことである。以下では、同会による「中国語話者の誤用分析」の視点に基づいた、「発音」と「文型」の研究例を挙げ、それに対応する松本編纂の教科書の説明を記す。

(1) 誤発音の矯正：

杉村等(2021)は、中国語話者の発音の難点として、「ナ行・ダ行・ラ行の間違え」、「促音(っ)や長音(ー)等の特殊音が難しい」等を指摘している³⁹。

松本は、正しい日本語の発音ができることを極めて重視し、特にD, E, Fでは多くの頁数を使って発音方法を説明し、矯正のための反復練習問題を提示している。その一例として、Eの「第1篇・仮名ト発音」（全13課）の一部を挙げると、以下の通りである⁴⁰。発音方法の説明の部分だけを記す。

① 第二課 練習一 き と ち ひ と し
五十音の中で発音が困難で間違い易いのは次のものである。反復練習し正確な発音を習得すること。キとチ。ヒとシ。ツとチュ。ソとシヨ。ナニヌネノとラリルレロ。タチツテトとダヂヅデド。マミムメモとバビブベボ。

き (Ki) は発音が大変難しいが、クとイの二音からなるので次第にき音に近づくようにする。ち (CHI) は (Ti) に間違えやすいので注意する。

② 第二課 練習二 な行 と ら行

な行は発音が難しく、ら行と混同し易い。な行は鼻音なので舌を平にして上顎に着けて鼻腔から空気を出す。ら行は鼻音ではなく舌音である。先ず舌先を丸めて上顎に着け、発音する時に瞬間的に舌を離すと同時に口腔から息を外に出す。な行は鼻孔を塞ぐと発音できない。ら行

³⁷ 例えば、当時「満州国」はじめ占領地等で広く出版された大出正篤（1942：187-198）等は日本の優劣性に対して中国の後進性を強調する内容になっている。

³⁸ 中国語話者のための日本語研究会編（2010）

³⁹ 杉村等（2021：20-21）

⁴⁰ 松本（1934：4-5）①から④の原文は中国語だけなので筆者が日本語に翻訳した。

は鼻孔を塞いでも全く問題なく発音できるところが異なる点である。

③ 第四課 練習二 マ行 と バ行

マ行とバ行は共に唇音だが軽重の差がある。マ行は軽く、バ行は重い。二行の区別は基本的に中国各省の出身者は皆できるが、四川省の人だけはマ行をバ行と間違えることが多い。

④ 第四課 練習三 タ行 と ダ行

タ行とダ行はもともと清濁軽重の区別があるだけだが満州方面の人はタ行の清音をダ行の濁音に誤る人が多いので矯正しなければならない。

以上の中で特に中国人の誤り易い発音について、出身地別に指摘した上で、矯正のための反復練習問題(省略)を多数提示している点が注目される。

(2) 「にとって」と「に対して」の誤用

張(2001)は、中国語母語話者の間違いやすい表現の一つに、「～にとって」を「～に対して」に誤用する以下の例を挙げ、その原因は中国語がどちらも「対」を使うためであると指摘している⁴¹。

(1) 这种工作对我不合适。(この種の仕事は私にとって(には)適切ではない。)

(4) 他对我不好。(彼は私に対する態度がよくない。)

上記の例から、「～にとって」と「～に対して」に相当する中国語がともに「対」であることがわかる。従って、中国語話者は「対」に当たる「～にとって」を「～に対して」に誤用する可能性がある。すなわち(1)「この種の仕事は私に対して適切ではない。」と言ってしまうことが指摘されている。この「～にとって」は基本的な文型の一つなので戦前の中国語話者にも同様の誤用があったと考えられる。

一方、松本のEの「～にとっては」の文型の箇所では、以下の通り説明されている。

「第百十三課 にとっては。」

「に取っては、對于の意」であると説明した後、上段に日本語例文、下段に中国語対訳を示している。

(日本語例文)・人間に取って、食物が生命の母とすれば、徳義は生命の父ともいふべき者です。
(中国語対訳)・對於人，以食物爲生命之母，德意則可謂生命之父也。

つまり、解説と例文及びその中国語対訳を付けることにより学習者が日中両語を比較対照して異同点に気づけるようにしている。こうした用例以外にも、本書では多数の語法(文型)についての的確な中国語対訳を付けることによって、学習者が異同点に気づくように工夫されている。これも一つの中国語話者の母語干渉による誤用解決への対策法と考えられる。

5.松本の中国語学習と日本語教科書

松本は、A編纂の時点では中国語(口語)はできなかったが⁴²、「私は、幼いころから中国の書物に好感をもっており、『四書』『五経』といった漢文を、ほかの人は苦手としたが私は愛読した。」⁴³と述べている様に松本は、幼少より漢籍を学んできたことや長年日本人学生に漢文を教えてきた経験もあったので日本語文語に対応する漢訳は可能だった。しかし宏文学院の会話教科書を編纂した時、同書を漢訳付きで編纂するためには、中国語(口語)を習得する必要性を感じたはずである。その後、彼は約4年間の北京滞在の機会を得て中国語(口語)を勉強した。また北京でCの会話教科書の中国語対訳を中国人の語学教師と共に取り組んだことは、大きな財産になったと考えられる。その成果として、帰国後すぐに中国語(口語)対訳付の日本語会話教科書Cを編纂できたからである。彼はその後、D、E、Fを編纂した際の中国語翻訳は、基本的に自分で行った上で、中国人に訂正してもらったと各書の緒言等に記している。松本の遺品が保管されている松本の郷里の掛川市立大東図書館には、多数の中国語参考書・辞書・新聞等があり、彼が生涯中国語を学習し続け、日中両語を比較研究しながら教科書の編纂をしていたことが窺える。特に注目する点は、松本直筆の中国語原稿である。これらを松本が中国語で執筆したことは、稿末の資料①から④でわかる。

⁴¹ 張(2001: 72-76) 同書には(1)から(5)までの例文があるが、ここでは(1)と(4)のみを引用した。

⁴² 松本(1939: 54)

⁴³ 汪向荣(1991: 236-237)

資料①には、次の中国語が記されている。

此書為漢譯日本文典之嚆矢言文對照舉例示證所附漢譯極為明晰是以往歲出版之後中華人士學日本語者莫不人手一冊視為津梁不意遭癸亥震火之後印版燒失殆盡致對於學者只需要無以供給殊為遺憾緣此將原稿從新訂正再出新版舉凡原稿中舉隅之不適切解說之不中肯者莫不徵之於教授之經驗加以修正俾學者容易理解凡研究日本語者倘能一閱此書則必能詳悉日本文法之法則兼曉日本口語之大綱也

「日本語訳（筆者訳）」

本書は漢訳日本文典の嚆矢である。口語と文語を対照して用例を示し、中国語訳を付けたので極めて明瞭であることから出版してから中国人の日本語学習者は、誰でも一冊は手にする津梁としてくれた。しかし凶らずも関東大震災に遭遇して紙型が焼失してしまったため、学習者の需要に対し供給ができず誠に遺憾に思い、元の原稿を訂正し新版として再版した。その際学習者が理解しやすいように幾つかの不適切な例文や要を得ない解説また教授経験にそぐわないと思える箇所には訂正を加えた。日本語を研究する者は本書を一読すれば日本語の文法の法則を詳しく理解し口語の大綱も知ることができる。

資料①はAの広告文原稿で、この原稿に若干の訂正を加えて実際に印刷された広告が資料②で、Eの最後の部分に掲示されている。資料③④はDの広告原稿で③が清書、④はその草稿である。これらの直筆原稿は、松本の高い中国語能力を証明する資料といえるだろう。

6.おわりに

前章までの内容を総合的に勘案すると、松本の日本語教科書編纂には、以下の特徴が挙げられる。

- ① 日中両語の同文（漢字）である点を最大限に活用し、日中両語を比較対照して学習者が両語の異同点を分かるように工夫する。

- ② 「文法説明」を重視し「語法（文型）・例文」に適切な「中文対訳」を付けて比較対照する。
- ③ 時代と言語の変化また語彙の変化（新語・外来語等）にも対応して訂正を加え再版し続ける。
- ④ 正確な発音と会話力の習得を重視し、反復練習問題や問答式による例文を提示する。
- ⑤ 実際の教室授業を通して学習者のニーズを把握し、自ら学習者の母語を学習し比較研究する。

上記諸点は、現在の日本語教育でも重要であると考えられる。日本語教育は、戦時中に中国への侵略戦争をはじめ大東亜戦争遂行のための手段として位置づけられ、多くの人々が加担した負の歴史を持つためか、植民地であった台湾や朝鮮で「国語教育」の名で行われた同化政策のための日本語教育も含めて、戦後まともに総括されず、学校教育でもそうした歴史は曖昧にされて今日に至っている⁴⁴。その結果、戦前の日本語教育と現在の日本語教育には大きな隔たりがあり、松本の日本語教育についても殆ど知られていない。しかし、松本の日本語教育は、短時間で日本語をある程度まで習得させることができるものであったため、現在の中国人留学生に対する日本語教育を考えるにあたり、長期間の学習を要する直接法を採った欧米型から脱却して、「松本式教授法」（対訳法、異文化理解、文法・発音重視等）、「松本式教材・学習材」（漢訳付・ルビ付、文法重視、体系化等）の長所を取り入れることを検討する時期が来ているのではないかと指摘もある⁴⁵。

現在の留学生の母語は多様化しているが、特に母語で漢字が使われているかどうかは、日本語を習得する上で大きな違いがある。従って、初級クラスでは漢字文化圏出身者と非漢字文化圏出身者に分けてクラスを構成し、母語との関係に配慮した授業を行う必要があると考えられる。そして松本が、終生学習者の母語を研究し、「日中言語対照比較」の視点から日本語教育を行った姿勢は、現在の日本語教育においても亀鏡とすべき点であろう。

参考文献

- 岩澤平（2020）「松本亀次郎の教育理念と実践に関する一考察—松本亀次郎と周恩来の師弟関係を通して—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』21 pp.155-166
- 汪向荣（1991）『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 大出正篤（1942）『標準日本語読本巻四』満州図書

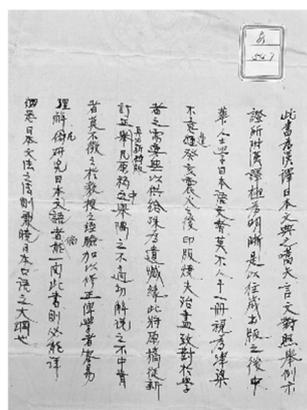
⁴⁴ 関（1997：序章）

⁴⁵ 張（1997：159）

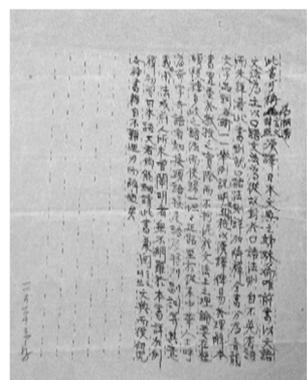
文具株式会社
 小池清治・鄭譚毅 (2001) 「『言文一致運動』の展開に見る日本・中国の相違」『宇都宮大学国際学部研究論集』12, pp.89 - 115
 宏文学院編纂 (1906) 『日本語教科書』金港堂書籍
 さねとうけいしゅう (1981) 『中国留学生史談』第一書房
 杉村泰・崔小萍・建石始・劉志偉・陳建明・中俣尚己・陳秀茵 (2021) 『中国語話者に教える—日本語教師読本 33—』webjapanese.com
 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
 田中克彦 (1981) 『ことばと国家』岩波新書
 中国語話者のための日本語研究会編 (2010) 『中国語話者のための日本語研究・創刊号』日中言語文化出版社
 張金塗 (1993) 「松本亀次郎の中国人に対する日本語教授法の一考察」『広島大学教育学部紀要』42 pp.207 - 213
 張金塗 (1997) 「戦前の中国人留学生に対する日本語教育の史的研究」(広島大学 博士論文)
 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』スリーエーネットワーク
 陳娟 (2014) 「清末中国人の日本語学習史に関する研究—教科書と辞書を通して—」(関西大学大学院外国語教育学研究科 博士論文)
 西香織 (2015) 「中国語教材における出会いと別れのあいさつ表現」『北九州市立大学国際論集』13, pp.81-96
 二見剛史 (2016) 『日中の道, 天命なり—松本亀次郎研究—』学文社
 松本亀次郎 (1904) 『言文対照漢訳日本文典』中外図書局
 松本亀次郎 (1914) 『漢訳日本語会話教科書』東京光栄館書店
 松本亀次郎 (1927) 『改訂日本語教科書』有隣書屋
 松本亀次郎 (1931) 『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』東亜書房
 松本亀次郎 (1934) 『訳解日語肯綮大全』有隣書屋
 松本亀次郎 (1936) 『漢訳日本口語文法教科書・普及増訂版』笹川書店

松本亀次郎 (1939) 「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』7(4), pp.51-62
 松本亀次郎 (1940) 『華訳日本語会話教典』有隣書屋
 南勇 (2007) 「近代中国の言語意識と『日本語』—中国留学生が編纂した初期日本語教科書をめぐって—」『成城大文藝』198, pp.114-139
 吉岡英幸 (2005) 「松本亀次郎編纂の日本語教材—語法型教材を中心に—」『早稲田大学日本語教育研究』6, pp.15-27
 吉岡英幸 (復刻版監修) (2011) 『松本亀次郎選集』(全7巻) 冬至書房

資料①



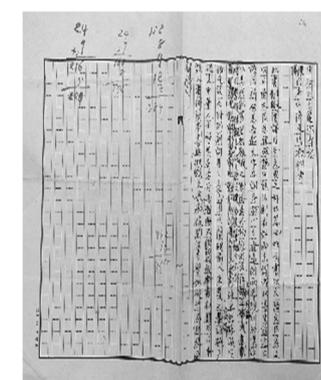
資料③



資料②



資料④



付記

世界平和を願い中国人留学生教育に生涯を捧げた日本語教師・松本亀次郎氏の遺徳を偲び擱筆する。

(Received: January 21, 2022)

(Issued in internet Edition: February 4, 2022)